

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

艦これ日和

【作者名】

k y u

【あらすじ】

何の知識もない少年が海軍に入り艦娘と一緒に困難に立ち向かうお話。

提督が鎮守府に着任しました。これより、艦隊の指揮に入ります。

着任

ただ生きているのが辛かった。

何も変わらない日々が「現実」という刃物として突きつけてられて怖かった。

深海棲艦なんて見た事ない化物なんてよりよっぽど怖いと感じていたんだ。

指揮官求む 技術不要

×××

まで

だから…

怪しい海軍の公募なんて受けてしまったのかもしれない。後悔を
するともしれずに

程なくしてから一通の手紙が届き、鎮守府への通行証と勤務する鎮
守府名などが書いてあった。

「佐世保か。少し遠いし部屋が支給されるみたいだからそこに住むこ
とになるな」

少年はぼつりと呟き、支度してある荷物を持ち住み慣れた家をあと
にした。

鎮守府に着いたのは日が少し落ちかけた頃で人は閑散としていた。

「ここが職場か。とりあえず部屋に荷物を置いてくるか」

しばらくは建物や周りを見回していたが少年は受付から部屋を聞き向かう。

? 「第一印象は大事だよな。頑張らないと」

「誰かいるのか？」

ガチャ

? 「あなたが新しい提督ですね。五月雨っていいます！よろしくお願ひします。」

「名前は判ったけどなぜここに居るんだ？ここは僕の部屋のはずだけど…」

五月雨「あれ？連絡されてないのですか？配属された際に

1人につき艦娘が1人配備

されるのですが」

「え？あ…見逃してたごめん」

五月雨「いえ、気にしてませんから大丈夫です」

「ところで君は中学生くらいに見えるけど…それに艦娘って？」

五月雨「私たち艦娘は第二次世界大戦時に運用された船艦です。

戦艦に魂が宿り、自我が芽生えて人間の姿になりましたが

兵器としての能力は残っており編成、改装、工廠、入渠、補給などの運用も可能です。

後、妖精さんが改装や工廠などお手伝いしてくれます。

見た目は提督の特質によって形成されているんです

「へ、へえ…幼く見えるのは気にしない方が良さそうだね。憲兵的な意味で」

五月雨「ご挨拶が済みましたので鎮守府内をご案内しましょうか？」

「そうだね。宜しく頼むよ」

五月雨「お任せください！」

そんなこんなで五月雨に最低限覚えておかない場所を教えて貰い、日も完全に落ちたところで部屋に戻り夜食をとることにした。

五月雨「お料理は任してください。一生懸命がんばります」

「船艦が料理…大丈夫？」

五月雨「大丈夫です。もうドジっ子なんて言わせませんから！」

「なんか不安になるように聞こえたけど頑張ってる」

五月雨「お任せ下さい！」

その日食べたカレーはいつも1人で食べる食事より格段に美味しかった。

船艦だとしても異性と過ごすのは久しぶりだ。

出撃

日々の暮らしに退屈を感じ始めたのはいつからだろう

昔は心から笑っていた気がするけどいつからか覚えてない。

仕事にやりがいを感じず、楽しいはずなのに心のどこかでわだかま
りを感じる。

僕は心をどこかに忘れてきたのかもしれないし欠陥だったのかも
しれない

五月雨「提督お早うございます。」

「ああ、五月雨おはよう」

就任して早一ヶ月。五月雨に戦闘や任務の受け方など様々な指導
を受け

鎮守府の正面海域を任されることになった。

正面海域にも深海棲艦は発生するが特に危険性はなく新人が最初
に任されることが多いらしい。

「今までは演習やビデオで戦闘について見てきたけどいざとなると緊
張するな」

五月雨「いよいよ私たちの出番ですねー！お任せくださいー！」

「うん、よろしく頼むね」

「あ、工廠で頼んでいた装備が出来ている頃だから取りに行こうか」

五月雨「はい」

工廠での装備の開発を試してみるとというのは五月雨の提案で資料を参考に妖精さんに頼んだのは2週間前。
聞いたところ頼んだ後は何ができるかはランダムらしい

「しかしランダムで開発って謎だね」

五月雨「そこは気にしてはダメですよ」

「ああ、うん。あ、交渉に着いたね。その妖精さんに聞いてみようか」

「おはようございます。この間のどこの受けられますか？」

妖精「お早うございます。2番工房で受けれますよ」

「ありがとうございます」

五月雨「ここですね。早速受け取ってきますね。」

「わかった。ここです」

↳数分後

五月雨「お待たせしました。出来たのは25mm三連装機銃でし

た。」

「よし、装備できるね。換装が終えたら早速今回の作戦に取り掛かる
うか」

五月雨「今回の出撃は鎮守府正面海域の見回りでしたね。何もなければ良いですね」

「そうだね。でも何があるか判らないから気をつけていこう」

五月雨「はい！」

鎮守府を出て数時間。見回りを終え帰宅の路につこうとした時、突然それは現れた。

それは黒々とした色彩を放ち大きな歯を覗かせながらこちらへ向かって来ていた。

五月雨「敵影確認。艦種は駆逐艦1隻です。」

「駆逐1隻か、先制攻撃仕掛けるよ。タイミングは任した。」

「はい！お任せください！」

「主砲斉射。やあーっ！」

弾は敵艦の少し前に落ち、すぐさま第2射撃を開始した。

敵も応戦してきたが数回の砲撃で夾叉した。

「敵艦補足、主砲斉射。たあーっ！」

敵艦に見事に命中し、煙をあげ始めた。

そして戦闘を継続するのを辞め撤退しよつと向きを変える。

「五月雨！敵を逃がさずここで仕留めるんだ」

五月雨「はい、逃しません！魚雷発射！」

数秒後：敵艦は爆発炎上しやがて沈んでいった。

五月雨「やったあ！提督、見ててくれました？」

「うん、五月雨見事だったよ。一応敵の援軍がないか警戒を続けたまま戻ってきて。」

五月雨「作戦完了ですね。お疲れ様でした！警戒を続行し帰港します。」

五月雨が数時間後に戻り、怪我の確認し疲れをとるためにドックへ向かわした。

「まさか初の鎮守府近海の見回り任務でいきなり遭遇するとは思わなかったな。」

今回は駆逐艦1隻だったから良かったけど今後は増えるかもしれないから気を付けな」と

「とりあえず今日の功労者の為にご飯でも作るかな。カレー以外の」

「ご飯を食べべしした頃五月雨が封筒を持って部屋に訪れた

五月雨「提督、総本部からお手紙が届きましたよ？」

「えーと、初任務で深海棲艦を撃沈した功績から新しく艦娘を一人追加で

配属してくれるみ

たいですね。艦名は…」